

各専門部会における議論内容

【他部会の意見は部会名を丸数字で表している】

検討分野	議論内容
1 都市計画	<p>(課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> 人口減少の現実の中で、そのマイナス面にも正面から光をあてて共通認識に立ち、長期的にみた都市の機能のあり方、方向性を考えていかなければならない コンパクトシティについては概念の共通認識がない <p>(基本的な方向)</p> <ul style="list-style-type: none"> 人口減少を前提としながらもまちづくりに積極性を出していく必要がある これからの帯広の都市計画は、これまでの都市形成過程を踏まえ、それにつながるサステナブル(持続可能)なまちづくりの視点が重要である 都市軸と帯広の森を中心とし、緑豊かで住みやすく、誰にとってもわかりやすいまちづくりが必要である <p>具体的な取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> 環境問題が世界的に注目されているなかで、帯広の森をもっと育てる必要がある これからの帯広市の特徴としてアピールすべき 高齢化時代を見据え、車社会における公共交通機関のアクセスを整備する必要がある
2 住宅・住宅地	<p>(課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> 空き地や空き家の利用が促進されていない 農村部の宅地の方向性を明確にする必要がある <p>(基本的な方向)</p> <ul style="list-style-type: none"> ニーズにあった宅地、住宅が必要である 帯広らしさや夢があることは必要である。そのためには面的な視点での機能別コンセプトにより集約したエリア区分が必要 帯広ではユニバーサルデザインのまちづくりに取り組まれているが、これはひとつの帯広らしい住宅・住宅地につながる 帯広の森の活用、高齢者が暮らしやすい住環境などは、夢のある宅地につながるものである <p>具体的な取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> 限りある土地の高度利用が必要である 近郊の持ち家から中心部のマンションへの住み替え促進が必要 ソフト面での取り組みが必要。住民同士のコミュニケーション、個性を活かしあえるまちづくりを進めるべき 安全対策の取り組みもまちに住みたいと思わせる手法の一つ まちにある程度の統一した家並みのデザインが必要
3 交通網(路)航空、鉄道、高速道	<p>(課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> 高速道路のプラス面を導き出す方策が明確でない 交通のアクセスがよくない 農村部の通信インフラ普及が遅れている <p>(基本的な方向)</p> <ul style="list-style-type: none"> 鉄道や高速道路のインフラ整備は充実してきており、今後はソフト面での利活用を中心に考えていくべき 高速交通のメリットを充分活用した物流の高速化が重要 <p>具体的な取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> 帯広の食に対する注目度が上がっている。関西方面とのつながりを深めていく必要がある インターチェンジの利活用の促進が必要 ハブ化をにらんだ空港利活用促進が必要 市全域をカバーする通信網が必要

検討分野	議論内容
4 農林業	<p>(課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> 食料自給率が低下している 農業への新規参入の受け皿が充分でない 気象変化の農業への影響が予想される 農業の多面的機能の保全が課題 大量生産、大量消費により消費者ニーズへの個別対応ができていない 地元の消費者が地場の農産物を食べる機会が少なく、良さが理解されていない 情報発信力が弱い 育てるといふ林業が成り立ちづらい状況にある <p>(基本的な方向)</p> <ul style="list-style-type: none"> 農業は、基幹産業として地域がしっかり支えていくことが必要 長期を見据えた農業施策、経営が求められる 地域の自給率を高めていくことが必要 十勝の農業から食の安全を考え、地産地消を進めるべき 地域で森を守ることが必要 林業については、環境がキーワードとなる <p>具体的な取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> 農産物加工、都市農村交流など、農村女性の活動を農業・農村の活性化につなげていくことが必要 企業の農業参入の可能性を探っていく必要がある これからはグリーンツーリズムやファームインなど消費者との観光での結びつきも求められる トレーサビリティなど十勝農畜産物の安全・安心を国民にPRしていくことが必要である 観光や物産の拠点をつくり、売り込む仕組みづくりが必要 帯広畜産大学を拠点とした連携が必要 林業は素材供給型から付加価値型への転換が求められ、工業との連携が必要となる 環境の側面から、針葉樹だけでなく広葉樹も必要
5 工業	<p>(課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> 十勝は農機の技術は高いが、工業全般では北海道の中でも技術力はまだ低く、技術力格差がある 産業の支援では、行政は公平性を求められることから限界があり、民間では利害関係が壁となる 企業は、経営講習会などに参加しても、余裕がないためその成果を出せない <p>(基本的な方向)</p> <ul style="list-style-type: none"> 新しい取り組みや企業努力、経営感覚が必要 産業を振興していくためには、食をキーワードに産業構造を構築していくべき 差別化によるとかちブランドの確立が必要 <p>具体的な取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> 流通の面で行政での仕組みづくりが望まれる 産業の支援では、独立した第三者機関による一元的管理が必要 食品などの地元産業に関連する企業誘致が必要 十勝は小麦の産地であり、地元製粉工場があるとよい 企業誘致は、食品加工など地域で付加価値を高められる業種の誘致が必要 () IT産業に視点を置いた戦略が必要である

検討分野	議論内容
6 商業	<p>(課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> 消費者ニーズの二極化がある 大型店や札幌圏に消費が流れる傾向にある <p>(基本的な方向)</p> <ul style="list-style-type: none"> 商業と観光の連携が必要 商店街に魅力が必要であり、点在しているものをゾーンとして集約し連携を図る必要がある <p>具体的な取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> 経営意識の向上を図り、やる気、知恵を出していくことが必要 価格、品揃え、選択の広さ、こだわりといったニーズを把握し、それに対応する必要がある
7 観光	<p>(課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> 観光資源の連携がない 観光をコーディネートする機能が充分でない <p>(基本的な方向)</p> <ul style="list-style-type: none"> 観光と商業、農業との連携が必要 単品での素材を連携させる仕組みを構築し、きめ細かな組み合わせによる体験・滞在型メニューを考えていくべき 情報発信により、地域内のヒトを動かし、地域外からは呼び込むことが必要 ゲスト、ホスト、そしてコーディネートするブローカーが必要 <p>具体的な取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> 観光資源を連携することにより、十勝・帯広に訪れた人にうまく回ってもらえるような工夫が必要であり、そのためには交通アクセスやコーディネート機能が大切 素材を活用するノウハウを高めていくことが必要 自主自立の取り組みに対して行政の支援が必要 高速道路を活かし、札幌圏から呼び込むことが必要 東アジアからの観光客を呼び込む可能性がある ばんえい競馬については、全国で十勝にしかない文化、農業の歴史のひとつとして観光資源として活用していくべきであり、裾野を広げるための受け入れ態勢が必要 パークゴルフなど安くて楽しめる素材もあり、それを観光につなげるPRを進める必要

各専門部会における議論内容

<p>8 ・労働</p>	<p>(課題) ・労働人口のあり方、捉え方を見直していく必要がある ・雇用の場が確保されていない ・雇用の受け皿となる企業に元気がない ・企業等の市外流出がある ・労働者のスキルアップ、待遇改善が課題</p> <p>(基本的な方向) ・女性や高齢者がそれぞれもつ強みを活かし、能力を發揮できるしくみづくりが必要 ・雇用の場の創出には産業の育成が必要 ・帯広の特性を活かした新たな雇用の創出する必要がある。 ・労働力確保には、住みやすい環境が整っていることが必要</p> <p>具体的な取り組み ・労働単価の安さを売りに、中心市街地の空きビルを活用した、エリアフリー業務(電話オペレーションセンターなど)を誘致する ・出産、育児がしやすい環境をつくり、女性が仕事と子育てを両立しながら、社会で活躍できることが必要 ・家族の介護に対する雇用上の支援制度の充実が必要</p>	<p>(課題) ・中心市街地に魅力が薄れている ・中心市街地活性については、個人レベルの利害関係もあり、共通認識に立っていない ・平日と休日では人が集まるための前提条件が異なる ・中心市街地に消費者が買いたくなるもの足りない ・業種の偏りがある ・ホコテンなどのイベントでは人が多く集まっているが、広小路までは人が流れておらず、イベント終了後の人の滞留がない ・中心市街地では、車社会が進みバス利用が少なくなってきた ・まちなかにくつろげる場所がない。 ・高齢者などが歩きにくい</p> <p>(基本的な方向) ・地域の核として中心市街地の活性は必要 ・人々が行って、くつろぎ、楽しめるような魅力づくりが必要 ・起点から人の流れを作っていくべき ・コミュニケーションの場が必要であり、交通と商業の連携も必要 ・高齢者の住宅や集いの場所など、高齢化を見据えた中心市街活性の手法を考えるべき</p> <p>具体的な取り組み ・個々の店が連携し、商店街単位での品揃えなどの魅力をPRしていく必要がある ・交通アクセス、コミュニケーション機能などを強化していく必要がある ・中心街の空き店舗対策が必要 ・高齢者の能力を活用して中心市街地の活性化を図ることが必要 ・人を集めるにはターゲットを絞ることも必要 ・点の存在を線、面に展開し、食をテーマとした飲食、物販、憩いの場を創出することが必要 ・特徴のある取り組みにより人を集める工夫が必要 ・商業経営者の売る努力が不可欠 ・空き地にマンションを建設するなど中心街に住む人を増やすことが必要()</p>	<p>(課題) ・地震が起きたとき、2次被害を防止するため避難場所が安全であることが必要であるが、耐震化の進捗が課題 ・現在 22 地域で結成された自主防災組織が、今後うまく機能していくことが課題 ・近隣町内会合同の防災訓練の参加率が悪く、災害に関する危機意識が少ない ・タクシー代わりなど不適切な救急車の利用がある ・大きな病院での医師の引き揚げなどにより、これまでの2次救急体制の維持が難しくなっている</p> <p>(基本的な方向) ・帯広十勝における災害については、活断層の上に位置することや近年の温暖化による集中豪雨が増えているなど、地震と水害についての対策を推し進めることが必要 ・災害に対して極めて弱い立場にある人に対して何が出来るか、またどういう人が弱者なのかを考えることが必要 ・計画の実効性を高めるため、計画策定の段階において、計画の対象となるコミュニティや社会的弱者などが計画づくりに参加できるようにすることが必要 ・2次救急においては、圏域で考えることが必要であるが、帯広市として医療体制をどのようにしていくかを考えていくことが必要</p> <p>具体的な取り組み ・避難所として使用される学校や屋体などの耐震化を優先して進めていくことが重要 ・町内会での防災班長等が独居老人の状況を把握するなど、地域によるシステムづくりが必要 ・学校での避難訓練の徹底 ・救急車の不適切な利用者に対する費用徴収を行う ・開業医が交代で厚生病院などに当直するなどの対応が必要</p>
<p>9 ・産業連携</p>	<p>(課題) ・これまでの産業連携にはマーケティングの視点が欠けている ・異業種交流や人材・ベンチャービジネス育成の結果が見えていない ・研究開発機能が十分に活用されていない ・BDF(バイオディーゼル燃料)の活用では、原料となる廃てんぷら油の確保、回収コストなどが課題</p> <p>(基本的な方向) ・業種を超えた連携をはかり、情報発信を促進していくことが必要 ・様々な産業、業種の有形無形の連携により情報交換をし、知的連携を図ることが必要 ・新たな産業創出のためのリーダーづくりなど、地域全体で盛り上げて長い目で仕組みをつくっていくことが必要 ・それぞれが持つ知識、経験、資源や技術の連携が重要 ・ニーズに合わせたシーズの活用が必要</p> <p>具体的な取り組み ・農業や食に関連する加工や開発を進めるとともに、ブランド化してPRしていくことが必要 ・十勝はバイオエタノールの可能性があり、残渣などの有効活用を図り、産業廃棄物の減量とエネルギー化を進めていくべき ・連携においては財団のような第三者機関のコーディネート機能が必要 ・産業連携を進める上で、帯広畜産大学や産業振興センター、食品加工技術センターの活用促進が必要 ・情報提供のためには人材の育成が必要であり、行政がヒト、モノ、カネの情報を集めて分析し、それを発信するシステムを作る必要がある ・情報通信ネットワークを活用した異業種間連携を図る必要がある ・産業連携を進めるためには、企業の意識と努力が必要 ・産業連携を進めるためには地域全体で支えていく姿勢が必要</p>	<p>(課題) ・JICAの活動が周知されていない</p> <p>(基本的な方向) ・観光、産業につながる交流を展開する必要がある ・今後も発展が予想される東アジアとの技術や人材の交流を進めていく必要がある ・国内では、関西のマーケットにねらいをつけることが必要 ・国際的な文化交流が必要</p> <p>具体的な取り組み ・大企業の従業員を対象に長期滞在型ツアーを企画してはどうか ・松崎町などとの子供の交流を人材育成面で成果をあげていくべき ・JICAを活用した、市民レベルも含めた国際交流を図る必要がある</p>	<p>(課題) ・大人が小学生を犯罪の対象とするようになってきており、車で広範囲に行動できることが犯罪に拍車をかけており、緑のおばさんが廃止され、子どもの見守りについて心配 ・子ども達、若者には、誰かが守ってくれるという意識がある</p> <p>(基本的な方向) ・自分でやろうと思ってもできない社会的弱者についてケアするという視点は必要</p> <p>具体的な取り組み ・子どもの見守る体制については、行政がお金をかけ責任をもって配置すべきであり、緑のおばさんは復活すべき ・緑のおばさんを1人配置するより、地域全体による見守りを行うことが健全なやり方であり、高齢者の健康づくりにもつながる ・「自分の安全は自分で守る」ということは、小さいころからの教育が必要 ・小学校・中学校の不審者情報を親の携帯に流すシステムは、有効であり、多くの家庭での普及が望まれる</p>

各専門部会における議論内容

<p>3 交通安全</p>	<p>(課題) ・高齢社会になり、車の運転をしない高齢者のバス利用が増えてくるものと考えられるが、公共交通機関を使うまでの間を歩くことが大変</p> <p>(基本的な方向) ・交通安全施設の整備は、車ではなく、通学路や人が使う道路を優先的に整備していくという方向性が必要</p> <p>具体的な取り組み ・高齢社会では、歩道の整備や除雪は重要 ・通学路を優先とした自転車道の整備が必要</p>	<p>(課題) ・医師不足が問題となっているが、帯広においても医師不足や診療体制の不足は起こりうる ・母親の病気に対する知識がなく、助けてくれる人が身近にいないということから母親の不安が高い ・利用率の低い各町村の病院の診療化により、帯広市の医療機関に負担がかかることが予想される</p> <p>(基本的な方向) ・母子保健を様々な側面より充実することが必要、このことは時間外診療の削減につながる ・かかりつけ医と大病院の役割分担を理解するなど患者側からの対応も必要 ・子育てについて地域の中で話し合いができる仕組みは重要 ・乳幼児健診だけでなく、母子手帳交付時、カップルが子どもを持つ時など、それぞれの場面ごとにふさわしい相談にのってくれる人がいることが必要 ・『圏域』で医療体制を考えていくことがこれまで以上に必要 ・医師会、薬剤師、保健師、市民が地域を挙げて、予防医療に向かうような仕組みづくりが必要 ・『あったかい地域』という発想から、ほんとうに困っているお母さんに対して、何らかの手立てをプラスアルファできないか検討が必要</p> <p>具体的な取り組み ・多重債務や収入のない人など、これまで妊婦健診に来ることができなかった人が受診できるような妊婦健診の更なる充実が必要</p>	<p>(課題) ・放課後児童対策については、学校側(教師側)の反応が鈍い ・今の子どもたちは、人とのつきあいがいないため、悪い人がそうで名人かの判断がつかなくなっている ・子どもたちが自分達同士で遊べなくなっている ・親自身も人と関わることが下手であり、遊び方も含め、子どもに人とどうやって関わってきたかということを教えることをしていない ・女性においては、一端退職した後の再就職が難しい ・長時間残業や人員削減などから、父親が育児に関わることができないという状況がある</p> <p>(基本的な方向) ・『学区』は、地域社会やまちづくりの大きなカギとなるものであり、学区の地域づくりを横断的にやる何らかの政策や方針が必要 ・放課後の児童対策については、帯広市として大きなテーマを持ち方向性ははっきりさせ、動きやすくすることが必要 ・女性が一時退職しても再就職ができる制度が普及することが必要、またそのための補助制度などについて民間へPRするほか、税制面などの優遇措置なども必要 ・働き続けていく母親をつくるということは、税収面においては増収となり、社会保障や労働者人口の減少の問題についてもプラスとなる 女性の労働力を活かし、社会のために使うという観点で子育てを考えていくことが重要</p> <p>具体的な取り組み ・障害児の一時預かりについては、学童と一緒にやることは、経済的なやり方であるだけでなく、子どもたちが育つという観点からみても、良い方向と考える</p>
<p>4 消費生活</p>	<p>(課題) ・高齢者については、相変わらず訪問販売の被害を受けており、家の鍵をかけてない人も多い ・独居老人は誰かと話したいという欲求があり、人を招きやすい このことは犯罪に遭い易いことにもつながる ・携帯電話やパソコンによるアダルト情報の高額請求やリフォームによる高額請求の相談が多い</p> <p>(基本的な方向) ・『お年寄りにやさしいまちづくり』という観点でまちづくりを考えていくべき ・食の安全という観点からいうと、今後環境の問題や世界的な人口増加により、日本においても食糧の問題が起こることが予想されるが、帯広十勝は、食糧を担う重要な場所であることを認識し、水と空気に恵まれている環境を維持していくことが大切 ・良いものを食するということが、健康につながり、医療費削減や環境問題の解決につながる こういった課題に少しでも良い方向になるようにしていくべき ・衣食住について、帯広でいいものをつくり消費者に提供していくためには、何ができるのか考えることが重要 ・食べ物については、味覚が形成される大事な時期(5~6歳)に何ができるかということが必要 ・地元の良いものを提供する動きは確実に出来てきてはいるが、広がっていくことが重要</p> <p>具体的な取り組み ・各コミュニティに時間的にサロンを設けることは、高齢者福祉と同時に犯罪防止につながる また、こういった場所に足を運べない人に対しては、訪問していくなどアイデアを膨らませることが必要 ・消費者能力検定試験など多くの人が消費生活について学ぶことが必要 ・学校教育において、お金を増やしたり、儲けることなどお金に関する教育をすることが必要 ・学校給食において、十勝での地産地消という観点から、地元の大豆を使ったメニューを給食に取り入れるなどの取り組みを行っているが、こういった取り組みは広げていくべき</p>	<p>(課題) ・高齢化の進行による社会保障費の増高 ・労働人口の減少により、社会保障費を支えていく人が減少</p> <p>(基本的な方向) ・誰もが平等に医療が受けられる国民皆保険を堅持していくことが大切であることを理解してもらうことが必要 ・定年延長や元気な高齢者が労働人口となるような発想が必要 ・無年金者の増加による生活保護費の増高は、財政的な負担を強いることになることから、国民年金に加入させることなども高齢者福祉を考えた場合、重要な項目となる</p> <p>具体的な取り組み ・国保についていえば、予防医療をやるのが医療費削減につながるのであれば、これを安全安心の政策の中に据えるということも必要</p>	<p>(課題) ・高齢者の中には、ひとりで自立して生活している人、少しの支えがあれば生活できる人、寝たきりの人など様々な高齢者がおり、様々がニーズや課題がある ・高齢者を支える家族をいかにサポートしていくかということは、今後の重要な課題となる ・結婚しない男性が増えており、今後は男性が親を介護する場面も出てくることから、労働力を支えることとの両立が懸念される ・療養病床の削減により、自宅に戻ってくる老人が増えており、支える家族の新たな負担が生じている</p> <p>(基本的な方向) ・介護保険外のサービスについては、民間が行うものと官が行うものがあり、その整理が必要 ・介護の受け手となる発想は大事</p> <p>具体的な取り組み ・介護する人が休めるような仕組みがあることが必要 ・元気な人だけが集れる町内会活動ではなく、独居老人などを対象とした町内会活動も必要</p>

各専門部会における議論内容

<p>9 障害福祉</p>	<p>(課題) ・日本は、障害者が地域社会から排除され、施設生活の人たちが多く国となっている、また、人口1万人に対する在院者数も多い ・約6割の人が学校教育を終えて、施設にいつているのが現状 ・ノーマライゼーションという言葉は、少しは普及したと考えるが、啓発はあまり力となっていない 頭で分かって、現実を受け入れないという日本人が増えている ・不登校というのは、ただの『状態』であるのに、病院に連れて行き『障害』という形にして、教育をさせないこととしている また、このことが引きこもりとニートにつながっている例もある</p> <p>(基本的な方向) ・帯広十勝においては、精神病に関しては入院を極力させない、長く入院している人を退院させて地域で支える、あるいは再発を地域で予防しようという取り組みにより、在院者数は全国数位の半分となったこの取り組みについては、知的や身体の領域の人たちにも同じようにできると考える ・脱施設化により、これまで施設にいた人たちを地域で支える仕組み、生活の条件整備をすべき ・こどもは障害であっても社会で生きていける力をつけてあげれば、精神障害に行かない例がかなりある 社会にいかに健全に出て行く機会をつくってあげることが、今後10年において必要</p> <p>具体的な取り組み ・障害者差別禁止条例を定めることは、生活全体に係わるものが検討されることになる 仕組みだけでなく意識をそこに向けてということにも役にたつ</p>	<p>1 学校教育(幼児教育・小中学校教育・高等学校教育)</p> <p>(課題) ・見守り体制の変化と親の安全に対する意識にギャップがある ・親が過保護であり、けんかの仕方が分からない、物を粗末にする子どもが育っている ・基本的なしつけが出来ていない子どもが多い ・学力レベルが高くない ・先生が親に対して毅然と物が言えないなど、先生が教育をしにくい環境になっている ・精神的に参加している先生が増えている ・新しい学習指導要領や小中学校の適正配置など、教育を取り巻く環境の変化し対応が求められている ・子ども会が弱体化している</p> <p>(基本的な方向) ・生涯学習の視点から、交通安全・防犯など子どもの安全対策を進めることが必要 ・将来の地域を支える人材の育成していくため、教育レベルの向上が必要 ・先生の質の向上が必要 ・地域と学校の交流を深めるため高齢者など地域の人が学校に入って行ける機会を充実することが必要</p> <p>具体的な取り組み ・親に対する学習プログラムが必要 ・家庭学級の取り組みを地域にもっとPRすることが必要 ・学校で行われている研究活動を家庭や地域で活かしていくことが必要 ・学校給食で十勝の食材を使うことが必要 ・小中学校の適正配置は地域づくりの視点で進めることが必要 ・小学校を中心とした地域づくりを進めることが必要 ・子どもに様々な文化・芸術体験をさせることが必要 ・子どもの心の教育に少年団の協力を得ることも必要 ・地域のボランティア活動を促すため資金的な支援が必要</p>	<p>3 生涯学習</p> <p>(課題) ・生涯学習施設でどのような意図を持ってどのような活動が行われているのが市民に十分伝わっていない ・学習プログラムがあることが知られていても、参加する動機付けにまで至らない</p> <p>(基本的な方向) ・生涯学習施設をもっと有効に活用し施設の活性化を図ることが必要 ・生涯学習施設の活動を広く知ってもらうことが必要</p> <p>具体的な取り組み ・多くの人に参加してもらえる学習プログラムの提供が必要 ・児童会館や動物園を大人の生涯学習活動に活用する視点が必要 ・展示物の説明のなど施設の魅力を高める工夫が必要 ・小学校を核に地域の生涯学習活動を展開することが必要 ・学校図書館を地域の生涯学習施設として開放することを考えられないか ・地域の学習活動を支援するボランティアへの資金的支援が必要</p>
<p>10 地域福祉</p>	<p>(課題) ・民生委員、老人クラブ、老人相談員がそれぞれの目的を持って、老人宅を訪問しているが、重複して訪問していることで、訪問される側が疲れてしまっている人もいる</p> <p>(基本的な方向) ・地域福祉の基本となる活動について、活動しやすい条件(場所の提供など)を整えることや様々な要望が出てきたとき、どうしたらよいか相談できる窓口やコーディネーターなどシステムを市が用意することが必要</p> <p>具体的な取り組み ・民生委員、老人クラブ、老人相談員のネットワーク化によりある程度集約した上で、支援体制がとれると良い</p>	<p>2 高等教育</p> <p>(課題) ・少子化が進み経営難の大学が多い中、大学誘致の環境は厳しい ・畜大はレベルが高く地元の人なかなか入れない</p> <p>(基本的な方向) ・地元の高校生の進路確保という視点から十勝に新しい大学が必要 ・産業、文化、福祉などあらゆる分野で知恵を与え、市民の学習活動に貢献する大学は地域にとって必要なもの ・既存の学校との連携も考えながら、高等教育を高校の次のステップとして考えることが必要</p> <p>具体的な取り組み ・新しい大学は看護や福祉系で進めていくことも必要。 ・最終的な形ではないが、大学誘致はサマースクールなどから取り組むことも必要</p>	<p>4 文化</p> <p>(課題) ・帯広はあちこちから入ってきた人で出来たまちであり、郷土芸能として文化を発展させるのは難しい ・子どもの頃から良い文化・芸術に触れる機会が少ない ・設備が整った大きな展示場がなく文化活動の発表の場がない</p> <p>(基本的な方向) ・子どもの頃から様々な文化・芸術に触れることができるよう体験機会を充実することが必要</p> <p>具体的な取り組み ・学校や地域の人材を活用して芸術・文化を子どもに伝えることが必要 ・情緒教育に学校にある陶芸の釜を活用することも考えられる ・ボランティアに退職教員を活用することも必要 ・一部の団体に対してではなく、幅広い活動を対象とした文化活動に対する支援が必要 ・美術館を文化活動の発表の場として活用できないか</p>
			<p>5 スポーツ</p> <p>(課題)</p> <p>(基本的な方向) ・競技レベルの向上が必要 ・市民の健康づくりの視点からスポーツ活動を促進していくことが必要</p> <p>具体的な取り組み ・競技レベルの向上のためには一流選手との交流が必要 ・合宿誘致のため地域として何らかの支援が必要 ・学校施設を整備する際は、一般市民がスポーツで活用することを想定しすることが必要</p>

各専門部会における議論内容

<p>6 環境保全</p>	<p>(課題) ・地球規模の環境問題は今後10年で益々厳しくなっていく ・大量消費・大量廃棄の中を生きてきた大人の環境に対する意識が低い ・市民の間に省エネ意識が十分に浸透していない。 ・環境を守る学校での取り組みと家庭の意識のギャップが大きい</p> <p>(基本的な方向) ・地球環境問題に地域として本気で取り組まなければならない ・市民一人一人が自分たちで出来ることに取り組むことが全体の環境保全につながる ・地域が一体となって環境を守っていく意識を高めることが必要 ・環境負荷軽減のため、現在捨てているものに目を向け利活用を図ることが必要 ・良質な水や空気を今後も維持・継承していくことが必要</p> <p>具体的な取り組み ・食料と競合しない分野でバイオエタノールの研究を進めることが必要 ・太陽光発電のほか、温泉や工場の廃熱、冷熱、家畜糞尿の利用など十勝の地域性を活かした新しいエネルギーの利用を促進することが必要 ・街路樹の剪定で出る枝をペレット化するなど地域の資源を有効に利用できないか ・地球温暖化対策の視点から植物を植えていくことが必要 ・学校内での取り組みから子どもの意識を育てていくことが必要 ・良質な水・空気を活かし花粉の疎開ツアアの受け入れなど考えられないか</p>	<p>(課題) ・空港から街までの間に防風林や街路樹もなく、景観づくりは進んでいない</p> <p>(基本的な方向) ・景観づくりの統一的な考え方をもって各主体が連携して取り組みを進めることが必要 ・農村の景観を大切にす視点が必要 ・防風林は十勝の代表的な風景、次世代に引き継ぐべき文化として守っていくことが必要 ・景観づくりをすすめるには何らかの誘導施策が必要 ・都市景観基本計画や都市環境デザイン委員会など既存の枠組みを踏まえ実効性のある取り組みを進めることが必要</p> <p>具体的な取り組み ・景観を守るためにはそこに住んでいる人に対する配慮が必要 ・国道、空港、鉄道の3つの入り口から帯広に入ってくる際の景観に統一感を持たせられないか ・それぞれの季節に対応した景観づくりが必要 ・地域ならではの草木を活用した景観づくりが必要 ・中心部では消費者金融など看板の規制も必要 ・遠くから眺めるだけでなく通りを歩いて楽しくなるような景観も必要ではないか ・街の賑わいも景観の一つとして捕らえることが必要 ・かつてのバリのように街の中を様々なポスターで彩ることも一つの景観</p>	<p>(課題) ・公園で子どもが遊んでいない。 ・市民協働で整備したちびっこ広場に対する支援が少なく、施設も老朽化している。地域での維持には限界がある。 ・木や芝生がありくつろげる公園は少ない ・飲食や火の使用で公園利用の規制があり利用方法が限られている</p> <p>・原生林がほとんど残っておらず人間の手が加わった緑が大部分 ・防風林が減少している。 ・街の中の緑が少なく、大きな木や立派な並木もない。 ・最も目立つ街中の角の一角に緑が少ない ・剪定した枝をごみとして出す際の制約が多い ・緑と花のセンターがあまり知られていない ・帯色の森の育林が停滞している</p> <p>・緑ヶ丘公園のボートなどかつては水に親しむ機会が多かったが、最近はこの機会が減ってきている</p> <p>(基本的な方向) ・公園は子どもの遊び場としてだけではなく多様な利活用を図ることが必要 ・今後、公園は維持やリニューアルをの活動が重要 ・河川は、河畔林があり虫や魚がいるのが本来の姿。河川工事の際は小さな生き物への配慮が必要</p> <p>具体的な取り組み ・公園の使い勝手や適正な配置の検討が必要 ・ノーテレビゲームデーなど子どもが外で遊ぶことを促すことが必要 ・地域が管理しているちびっこ広場に対する支援が必要 ・公園利用の規制を緩やかにして利用方法の範囲を広げられないか・駐車場があつて広くて水で遊ぶことができる公園が必要ではないか ・岩内自然の村やポロシリのキャンプ場を外に向けて発信すべき ・防風林伐採の影響が出てから木を植えても遅いことを理解してもらうことが必要 ・街路樹の剪定は市民協働で進めることが必要だが、個人で手をつけてよい範囲などの指針があれば取り組みやすい ・街路樹は電線の上に樹幹を伸ばし木を大きく育てるような剪定が出来ないか ・交差点の角に緑を増やすことで街の印象が変わってくるものであり角地に立地することが多い商業施設に対する誘導策が考えられないか ・紅葉など季節によって景観が変わるものを街路樹に出来ないか ・緑と花のセンターの利活用が必要 ・統廃合された学校の跡地を活用して緑を増やすことを考えられないか ・郊外にも街路樹が増えればよい ・子どもの成長のためには、河川整備を含めある程度の危なさは残っていても良いのではないか。</p>
<p>7 ごみ減量・資源化</p>	<p>(課題) ・ごみ収集の有料化後、河畔林などで大量のごみが捨てられているのが目立つようになった ・川などでごみを不法に焼却している人がいる ・商品の包装が過剰である ・環境・リサイクル活動に取り組む企業が多いが活動の励みになるような社会的評価が得られにくい</p> <p>(基本的な方向) ・ごみをつくらないという視点も必要 ・容器・包装のごみは大量に出ており、リサイクルできるものは積極的に回収に取り組む必要がある ・ごみの減量化やリサイクルなどは一人一人の小さな取り組みが大きな効果を生み出すものであり、市民の日頃の取り組みを大事にしていくことが重要</p> <p>具体的な取り組み ・不法投棄は厳罰化していくことが必要 ・商店街などの小売店で簡易包装やエコバッグの利用促進を率先で取り組む必要がある ・エコバック普及の取り組みを一企業の取り組みにするのではなく、地域的に展開することが必要 ・活動の励みとするためリサイクル等に取り組む優良企業・団体等を表彰してはどうか ・町内会で行っている資源回収の取り組みへの支援が必要</p>	<p>(課題) ・除雪が遅い地域がある ・道路の車線誘導の矢印に不可解なものがある ・車道を除雪した雪が歩道に堆積され危険な状態となっている ・違法駐車を除雪の大きな妨げとなっている</p> <p>(基本的な方向) ・除排雪の技術的な改善が必要 ・高校生の自転車通学を考え歩道を広くすることが必要ではないか ・学校の統廃合である地域では自転車が多く通るところを子どもが通学しななければならない状況が発生することを踏まえて歩道整備や歩行者、自転車の分離を考えることが必要 ・多少土地の価格が高くなっても、除雪のこと考え、区画整理時に道路幅を広くすることは考えられないか</p>	<p>(課題) ・上下水道料金が低い</p> <p>(基本的な方向) ・現在の水質を今後も守っていくことが必要</p>

各専門部会における議論内容

共 1 市民協働・地域コミュニティ	<p>(課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どこまで市民協働でやるべきなのか、市の意図が市民に伝わっていない() ・町内会の問題は、今の町内会をどうしていくか、新規加入をどう増やしていくかという両面から考えることが必要() ・町内会の加入率が低い() ・町内会に入りたいたいと思っても、入りにくく感じている人もいる() ・個人情報保護により地域で支えあうために必要な情報の把握もままならない() ・町内会の制度が出来てからかなりの年月が経っており、今の形が時代に合わなくなってきている() ・町内会活動が最終的に目指しているものは親睦なのか、協働なのかははっきりしない() ・「市民協働の取り組みを、具体的にどうすすめていくかわからない」といった声がある() ・地域の狭い範囲や組織での利害関係にのみ動くものを『住民』とするなら、『住民協働』はあっても、『市民協働』には程遠いということになる() <p>(基本的な方向)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の課題を地域で解決するという考え方を取り戻す必要がある() ・市がすべきことと市民がすべきことの明確な基準が必要() ・協働が必要な分野は何かということをしっかり捉えることが必要() ・退職をむかえた60歳台の方々の力をどうやっていかしていくかということが大切() ・医療・保健、社会保障、子育てなどについては、行政が音頭をとってもうまくいかない部分もある。民間が立ち上げたものや、民間の力というものに対して、経済的なものを含め、行政がいかにバックアップしていくかということが重要() ・帯広市には趣味の会を含めサークルの数は多い、これらを有効に動かせる仕組みがあれば、得意分野で動ける人たちが結構いるはず() ・市民協働を市の仕事を請け負うという構えた形でなく、手が空いているときに自分たちが出来ることをやるという形で取り組むことが必要() ・総合計画で目標をしっかりと示すことが協働で地域の問題に取り組むという意識醸成につながる() ・審議会などに出席できない人たちの意見を聞く仕組みが必要() ・市民協働の前提には分かりやすい情報の公開が必要() ・行政側が地域に向いて情報発信していくことが必要() ・ボランティア活動の呼びかけなど、情報がもっと確実に伝わるよう工夫が必要() ・町内会や行政の動きなどの情報提供と呼びかけを地道に取り組んでいかなければならない() ・活動に対する経済的あるいは精神的なメリットやインセンティブが必要であり、そのための時代に合った仕組みづくりをすべき() ・計画づくりの段階からの市民協働が必要() ・数多くの団体が存在するが、こういった団体をコーディネートしていく仕組みが必要() ・官と民間の団体や個人との間を専門的にコーディネートする仕掛けや団体が必要() ・自主的にやっているものを育てていく観点が必要() ・協働においては、意識ある人たちをどう集め、動いてもらうかがカギとなる() ・人づくりが大切であり、健康、心、技術などを高めていくための教育が必要() ・協働に結びつくきっかけづくりが必要() ・機会があればボランティア活動をしたいと考えている人をボランティア活動に誘導することが必要() ・ボランティアのコーディネートを行うことが必要()
-------------------------	---

共 1 市民協働・地域コミュニティ	<ul style="list-style-type: none"> ・誰もが集まりやすい町内会活動についての工夫が必要() ・町内会は小学校区単位などで再編成することが必要() ・大きな町内会は協働の受け皿になる() ・町内会としても町内会に入ることのメリットが見えるような活動をしなければならぬ() ・地域に参加していない人、参加できない人の立場も理解し、ケアしていくことも必要() ・PDCAサイクルの考え方で進めていく必要がある() ・人と人とのふれあいを大切に、マンパワーを活用すべき() ・行政では画一的な面があるが、市民協働は地域ごとにフレキシブルな対応が可能であり、うまく組み合わせることが必要。できるところからやっていくべき() ・企業の市民協働への意識に対する仕掛けが必要() ・個人レベル、企業レベルのそれぞれの得意分野で協働を進めていく() ・行政と市民がコミュニケーションをとり、一緒にやっていく必要がある() ・コミュニケーションを促進するためには、人の集まる場所を有効に活用するべきであり、そのためには民間の力が求められる() ・帯広市民の中で『弱者』の位置づけが必要() <p>具体的な取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まちづくりの活動をしている人にスポットを当て、それをPRし市民の意識を高めていくことが必要() ・活動の励みとするため、継続的な活動で地域に貢献しているグループや会社を表彰することも必要() ・例えば、シルバー人材センターのようにボランティアとして活動できる分野を登録し、依頼があった場合に登録した人に連絡が行くような仕組みができないか() ・行政主導で町内会の準会員制度を普及させることが必要() ・市民協働を発展させるには、既存の事業費の一部を市民の活動支援に当てていくなどの支援が必要() ・市役所職員が町内でリーダー的な役割を果たすなど、積極的な姿勢を見せることも必要() ・町内会に入りやすい仕組みが必要ではないか() ・一定の条件で市民を抽出してダイレクトメールでボランティア登録を呼びかけるなどできないか() ・町内会の加入を増やすため市が主導してマンションの管理組合などに働きかけることが必要() ・市民、企業からプランやテーマを提案してもらい、期限と目標を定めて活動メニューを示す仕組みが必要() ・高齢者と子どもや若者がいっしょに参加できるような仕組み、イベントが必要。学校や老人会と地域とのつながりも大切である()
-------------------------	--

共 2 自治体経営	<p>(課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・予算を消化しないと翌年度の予算が減額されるということが、予算付けを不明確にしており、無駄遣いにもつながっている() ・自治体経営において、PDCAサイクルをきちんとやる必要があるが、地方自治体においては、1年ごとのサイクルマネジメントはできるが、次期の計画にどういうふうにつながっていくのかという部分が透明になっていない() ・地方分権が進み、国や道の道路管理などの仕事が市に移譲されると、災害時の対応が不十分になる恐れがある() <p>(基本的な方向)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・税収の増加策など財源確保の視点が必要() ・バランスシートの周知など、税金の使途を市民に示していく必要がある() ・年金や税などの滞納が市民に及ぼす影響についても、わかりやすく知らせることが必要() ・医療費がかからないように市民の健康をまず第一に考え、地域を挙げて予防医療に取り組むという大きなテーマをつくる必要がある() ・選挙に行き自分たちの代表を選ぶということが、市民の自治体経営への参画の基本() ・市民が自治体経営に参加するための情報開示を進めることが必要() ・自立した自治体経営という前提のもと、市民の声が行政に届けられる体制づくりを一層進め、地域にニーズに対応することが必要() ・行政と市民感覚のずれがないようにしなければならない() ・市職員の人材育成が必要() ・職員には調整能力よりも積極的な姿勢が必要() ・民間からの人材の登用や人材交流を進めるべき() ・自治体の財政が厳しい中、市民が危機意識を持ち、可能なものは自らやる姿勢で、市民協働、コミュニティでカバーしていくことが必要。() ・行政で全ての市民ニーズに対応できない。何でも市がやるべきという考えを変えていくことが必要() ・市はこれまででしかできないということを市民に知ってもらうことが必要である() ・人口が増えることが必ずしも市民の生活が豊かになることにはつながらない。地域の人材を活用し市民協働で地域づくりを進めることが必要() ・評価システムについては、市民の目に触れる機会を増やし、無駄な計画や優先順位のチェックが必要() ・社会経済情勢の変化が著しい時代であり、評価を活かすチームは短くなってきている。3～5ヵ年で、計画についても評価、見直しが必要となってくる() ・箱モノの整備は最小限にとどめ、既存のストックの有効活用を図っていくべき() ・自治体経営には機能性・効率性を求めていくことが必要() <p>具体的な取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・無年金者の増加により、今後は、生活保護受給者も増えることが予想される。このことは財政負担を強いることになることから、国民年金への加入は重要なものとなる() ・政策評価には第三者による評価組織が必要() ・行政がやるべき仕事とアウトソーシングでできる仕事の仕分けが必要() ・第三セクターでは人事面などにおいての効率的な運営を図っていく必要がある()
-----------------	--

各専門部会における議論内容

共 3 広域連携	<p>(課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・不登校やいじめなど、他町村から帯広市のフリースクールなどに通うことができないなど地域の人たちが困って帯広に助けを求めているも救ってもらえないという実情がある() ・ライフサイクルにおける時間割が行われており、ひとりの人生をつなげてみることができないことが多くの弊害を生じさせている() ・農村と街の子どもの交流があまりない() <p>(基本的な方向)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・広域連携は地域のポテンシャルを高めることにつながる() ・十勝管内に手を差し伸べて連携していくのが帯広市の役割であり、おごることなく十勝の母都市としてのリーダーシップを持つことが必要() ・広域連携は、できるところ、小さなところから進めていくことが必要() ・広域連携につながるニーズの掘り起こしが必要() ・管内町村との情報交換を積極的に進め様々な機能の集約化を進めることが必要() ・十勝全体でビジョンを共有する話し合いの場が必要() ・道州制について検討する中で十勝圏としての役割を明らかにしておくことが必要() ・経済的・人的な効率性を出す仕組みを市町村で考えていくべき() ・合併は経済効率だけを考えるのではなく、住民の暮らしやすさやアイデンティティ(独自性、主体性)保全の視点が必要() ・体育施設や文化施設などは広域的に機能分担し、十勝全体で利用するという考えに立つことが必要() ・産業面での連携を深めるべき() ・帯広市が主導的役割を果たしてよいものと、みんなで協働でやっていくことがよいものについて、広域連携において分けて考えていくべき() ・救急医療については十勝圏域で考えることが必要() ・地場産品の高付加価値化は十勝圏域で連携して取り組む必要がある() ・観光は釧路地域などと連携した取り組みを進め、地域全体の魅力を高めることが必要() ・道州制、特区、高等教育機関など、十勝全体で支えあっていくべき() <p>具体的な取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公立病院は広域的な運営が必要ではないか() ・身近な医療は各地域、高度な医療は拠点化するなど医療のレベルに応じて配置することが必要() ・小学校など教育の中で農村と街の交流を進められないか()

共 4 男女共同参画	<p>(課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『男女共同参画』が、『仕事と生活の調和』の問題で、女性にも男性にも係わることであり、すべての人たちに対する人権の問題でもあることということが理解されていない() ・社会では男女共同参画はまだ根付いていない() ・女性は控えめにという考えが年配の人には根強い。女性が何かの先頭に立つのはかなり勇気がいる() ・業種によってはまだまだ閉鎖的なところがあり、育児休業の制度も出来ていても、現実には休みを取りにくいのが現状() ・事業所に対する助成制度も様々な制限があり使いにくい() ・学校現場に性差を否定し男女平等社会をつくるという思想的な要素が入ってきている() ・これまでは、女性が介護をしてきたことが多いが、今後は男性が介護をする場面も出てくることから、労働力を支えることとの両立が懸念される() ・父親が育児にかかわることができない状況は、次世代育成にとってマイナス() <p>(基本的な方向)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・少子高齢社会により労働力人口の減少が起きてくるが、この資源の一つとなるのが女性の能力を活用することが必要() ・働き続ける女性をつくるということは、税収面については増収につながり、社会保障や労働人口の減少についての問題に対してもプラスとなる() ・女性の能力を発揮できるような環境を作ることが必要() ・男性の仕事と生活のバランスを考えることも重要() ・男女それぞれの良さを引き出し役割分担することが必要() ・業種によっては女性に対応できないものがあるが、意欲や能力があればチャンスを与えることが必要() ・学習会ではなく、女性が社会で活躍するために必要な直接的な支援を行うことが必要() ・女性の立場を考えながら支援に取り組んでいく必要がある() ・男女共同の啓蒙やハンデを埋める対策が必要() ・女性の社会への帰属意識を高めていく施策も必要() ・子どもたちには平等ばかりではなく競争することもどこかで教える必要がある() <p>具体的な取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・女性の再就職支援については、補助制度などについても企業へのPRを行うほか、税制面の優遇などの推進が必要() ・子育てが落ち着いた人が職場に復帰できる仕組みが必要()

共 5 その他(ユニバーサルデザイン、平和、人権、アイヌの人たちなど)	<p>(課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人口減少を受け止めてその中で特徴あるまちづくりをするのか、人口増加に力をいれるのか、方向性をしっかりしておかなければならない() ・十勝管内での人口流出を認めるのかどうか議論すべきところである() ・人口減に伴う財政的負担増の認識が不足している() ・UDについては、ハードの部分のところだけに力点を置く考え方は偏りすぎである() ・ある程度ハード面が解決しても、差別や排除などの点で社会のみんなが同じように関わりを実現できるかというまた異なる問題がある() ・高齢社会を迎えるにあたって、公共交通機関や、それに乗るまでの手立てなど、移動の手段や方法については大きな課題となる() <p>(基本的な方向)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人口減少を前提としながらもまちづくりに積極性を出していく必要がある() ・人口減少は大きな課題であるが、その中身が重要であ、帯広・十勝の人口、産業、将来像をしっかりと押さえるとともに、リーダーシップを発揮していくことが必要である() ・まちづくりにおいて人づくりが大切である() ・素材を活用し、情報発信する知恵や工夫があれば二地域居住は可能性がある() ・人口については、全体の審議会ですさらに議論していく必要がある() ・住宅整備、雇用促進、中小企業の育成による若者の定住が必要() ・身体的ハンディキャップを持っているため、関われない、アクセスできないということについて、アクセスできるようハード整備することは必要 ・財源を確保し計画を実現するために税制などの仕組みづくりが必要() ・文化に力を入れていく必要がある() ・行ってみたいまち、住んでみたいまち、住民自身が誇れるまちにして、多くの人が帯広を訪れるようにすべきである() <p>具体的な取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・壮年学級のようなそれぞれ得意な分野を持つ人材を活かしたコミュニケーションの場を作れないか。たとえば学校の廃校舎や余剰教室を活用した地域の回遊軸のようなものを組み立てられないか。そのようなネットワークを自宅とも結んで交流してはどうか。それによってまちを歩くことによる健康づくり、バス利用の促進、生涯学習、コミュニケーションの推進などいろいろな面で効果をもたらすことができるのではないか() ・移住者に対する地域の受け入れ態勢が必要()

これまでの総合計画の都市像

帯広市総合計画 昭和34年度～昭和43年度	第二期帯広市総合計画 昭和46年度～昭和55年度	新帯広市総合計画 昭和54年度～昭和63年度	第四期帯広市総合計画 平成元年度～平成12年度	第五期帯広市総合計画 平成12年度～
<p>(基本的目標)</p> <p>この計画は、帯広・十勝地域の資源を最大化に活用して産業を振興し、経済の規模を拡大発展させ、市民所得水準を向上することによって市民生活の安定と福祉の増進をはかることを主眼としている。こうして明るく豊かな住みよい帯広市-<u>近代的田園都市</u>-の建設をはかるとともにこれと一体的な関係にある十勝地域ならびに補強的な関係にある道東地域の発展に寄与しようとするのである。</p>	<p>(将来の望ましい都市像)</p> <p>帯広市の都市像は、<u>人間尊重を基調とした「近代的田園都市」</u>とする。</p> <p>雪と寒さを克服し 澄みきった青空 きれいな水 ゆたかな緑</p> <p>機能的な空間のなかで 生活と生産の調和をはかり 市民が連帯感と誇りとをもって 文化的でくらしやすい都市を 北方の風土のうえに創造する。</p>	<p>(帯広の都市像)</p> <p>豊かな自然と 北方の文化に根ざした <u>活力あふれる十勝の中核都市</u> 開拓100年の歴史をふまえ <u>心のふれあいのあるまち</u></p> <p>帯広のまちづくりの歴史は、晩成社の人々の人植にはじまる。彼らは、未開の森林原野を切り拓き、十勝野に一大農業王国を築き上げようと企図した。それは北海道の歴史のなかで、自らの力により大地を拓こうとした特色ある開拓であった。帯広を切り拓いたわれわれの先人には、進取と自立の精神が脈々と流れていた。この精神を受け継ぎ、市民自らが立ち上がり、まちづくりに参加し、理想的なふるさとをつくりあげていかなければならない。</p>	<p>(帯広の都市像)</p> <p><u>緑ひろがる北のフロンティア都市おびひろ</u></p> <p>都市は、誰もが自由で生きがいを持ち、平和で幸せな生活を営む場である。</p> <p>開拓の歴史とフロンティア精神が今なお息づく帯広市は、自然と都市の共生をはかりながら、地域の特性を生かした、たくましい産業と北方の文化を創造し、誰もが健康で安心して暮らせる、人間尊重の精神を基本とした快適な地域社会の実現をめざすものである。</p>	<p>(まちづくりの基本方向(都市像))</p> <p>現代の文明がつくりあげてきた社会は、物質的な豊かさを手にする一方で、地球規模の環境問題や食料問題、教育問題、都市問題など、多くの課題に直面しています。</p> <p>また、我が国においても、少子・高齢化や経済のグローバル化への対応、東京一極集中といった地域間格差など、さまざまな問題を抱えており、これまでの発展を支えてきた社会や経済のしくみを、構造的に改革することが必要になっています。</p> <p>21世紀を歩み出すこの期間は、これまでの文明社会や経済社会のあり方を見直す重要な時期にあり、社会全体にとっても、私たち一人ひとりにとっても、これまでの歴史や現状をしっかりと見つめ直す姿勢が必要になっています。</p>
<p>帯広市新総合計画 昭和38年度～昭和45年度</p>	<p>わが国は、戦後、特にここ数十年の間に、進歩した科学技術にささえられ、飛躍的な経済成長をとげ、国際社会においても着々としてゆるぎない地位を確保している。さらに、1970年代は、情報化社会への展開の時代であるといわれ、全国ネットワークの形成のうえに、いっそうの経済成長が予想されている。</p>	<p>晩成社を主宰した依田勉三翁は、「バッタや冷害は毎年は来ない。もっとも恐ろしいのは人間の精神の荒廃である」と語り、田畑の開墾と同時に、「心田の開発」による人づくりをもめざしていた。帯広市は明治16年、晩成社の入植以来、昭和57年で2世紀を迎える。この間、先人の英知と努力によって豊かな生活を営めるまでになった。しかし、近年の高度成長経済による物質的な豊かさに比べて、人づくりの面ではどれほどの深まりがみられたであろうか。今こそ、帯広2世紀の礎として市民の自立と連帯を強め、創造性のある人づくりをめざさなければならぬ。</p>	<p>本市は、高い理想を掲げて入植した開拓者たちの、ひたむきな情熱と進取の気風を受け継ぎ、苦難の歴史を乗り越え、日本を代表する農業地帯・十勝の中心都市として発展してきた。</p> <p>本市のまちづくりの基本は、一貫して人間尊重の精神である。市民誰もが住みよく生きがいのある地域社会の創造に向けて、豊かな自然と北方の文化に根ざした活力あふれる十勝の中核都市をめざしてきた。</p>	<p>こうしたことから、これからのまちづくりに向けては、20世紀の経済社会のトレンドではない、新しい視点によるまちづくりが求められてきます。</p> <p>これまで本市は、人間尊重を基本に、都市と農村の調和をはかりながら、活力あるまちづくりをすすめてきました。</p>
<p>(計画の基本的目標)</p> <p>都市づくり、もしくは地域開発計画の目標は、基本的に、市民所得水準、生活文化の向上および福祉の増進をよりよく達成させるところにある。</p> <p>この計画においては、このような目的に接近させるため、</p> <p>第1に、市経済の基調をなす十勝地域経済の高度化、経済規模の飛躍的拡大をはかり、市および市にかかわりあいのある広い経済社会の一体的な発展をうながす拠点都市の基礎を確立し、もって国民経済ならびに道民経済に寄与する。</p> <p>第2に、市民の理想とする近代的な都市生活を享受でき、都市発展に必要な人材の定着しうような、美しく、便利で住みよい都市としての基盤を造成する。</p> <p>以上によって、地域の特色をいかした、緑濃く、活動力のあふれる生産の場であり、安らかな憩いの場であるとともに、より近代的な産業の発達しうる都市-<u>近代的田園都市</u>-を建設することを目標とする。</p>	<p>しかし、人間生活に物質的なゆたかさをもたらした現代文明は、人間を疎外し、天与の自然を破壊してきた。</p> <p>人々は、舗装された道路を得るために、百年の年輪を刻んだ大木を切り倒し、生活の利便性を追求するあまり、澄みきった青空を失い、おびただしい公害の発生により、生命の安全すらおびやかされるという矛盾、深い病根に悩みきっている。</p> <p>次の社会は、人間尊重の原点にたち、これらの欠陥を克服し、高密度な福祉社会の建設をはからなければならない。</p> <p>まちは、そこで生活する人々が、知恵を寄せ合い、人格と知性を磨きながら、固有の風土に根ざした人情、風俗、伝統を築きあげ、将来に向かって、住みよいゆたかな生活の場としてつくりあげていくものである。</p> <p>本市のまちづくりの基本は、人間尊重の精神を基調とし、ゆたかな人間性と連帯意識により結ばれた市民が、計画的に設定した空間のなかで、生活と生産の調和をはかり、澄みきった青空、きれいな水、ゆたかな緑をまもり、健康で、安全で、明るいまち、学問や芸術を大切に、雪と寒さを克服して、北国にふさわしい生活文化を創造していく、くらしよいまち、さらに北方都市として、国際交流を深め、新しい時代にふさわしい都市の機能を高め、人材と情報を集積し、北海道開発の一翼をになうまちとして築きあげていくことであり、本市将来のもっとも望ましい都市像-<u>近代的田園都市</u>-とするものである。</p>	<p>人々は、舗装された道路を得るために、百年の年輪を刻んだ大木を切り倒し、生活の利便性を追求するあまり、澄みきった青空を失い、おびただしい公害の発生により、生命の安全すらおびやかされるという矛盾、深い病根に悩みきっている。</p> <p>次の社会は、人間尊重の原点にたち、これらの欠陥を克服し、高密度な福祉社会の建設をはからなければならない。</p> <p>まちは、そこで生活する人々が、知恵を寄せ合い、人格と知性を磨きながら、固有の風土に根ざした人情、風俗、伝統を築きあげ、将来に向かって、住みよいゆたかな生活の場としてつくりあげていくものである。</p> <p>本市のまちづくりの基本は、人間尊重の精神を基調とし、ゆたかな人間性と連帯意識により結ばれた市民が、計画的に設定した空間のなかで、生活と生産の調和をはかり、澄みきった青空、きれいな水、ゆたかな緑をまもり、健康で、安全で、明るいまち、学問や芸術を大切に、雪と寒さを克服して、北国にふさわしい生活文化を創造していく、くらしよいまち、さらに北方都市として、国際交流を深め、新しい時代にふさわしい都市の機能を高め、人材と情報を集積し、北海道開発の一翼をになうまちとして築きあげていくことであり、本市将来のもっとも望ましい都市像-<u>近代的田園都市</u>-とするものである。</p> <p>「オベレヘレブ(川の合流する地点)」という先住民の言葉に端を発するように、帯広は人類定住の基本となる川とかかわりの深い理想的な位置にある。その立地条件から本市は、十勝の政治、経済、文化の中心的役割をになってきており、将来とも各町村と有機的な連携をはかりながら、均衡ある発展をめざさなければならない。</p> <p>開拓100年の歴史をふまえ、北国の厳しい自然を生かした、新しい北方文化と快適な生活環境を創造し、産業の振興をばかり、進取の気風に富み、明るく連帯感あふれる市民意識を培い、心ふれあうまちを市民の手でつくり上げていくことが、豊かな自然と北方の文化に根ざした活力あふれる十勝の中核都市を築くことであり、帯広2世紀へ向けて歩むべき基本方向である。</p>	<p>私たちは、これまでのまちづくりの理念と情熱を継承し、自立と連携を強め、創造性のあるひとづくりをすすめながら、21世紀にふさわしいまちづくりをすすめていかなければならない。</p> <p>それは、若者が集い、生き生きとして活動することができ、誇りをもって働ける環境がある産業基盤の確立をめざすことである。</p> <p>さらに、豊かな緑に包まれた快適な都市づくりをめざすことであり、人々がもっている自由で豊かな人間性の発揚がはかられる地域社会の実現をめざすことである。</p> <p>十勝の大地から人や文化や産業が育つ。十勝の基幹産業である農業は、生命を育てる産業であり、人々に生命の糧を供給する産業である。そこには、自然と共に生きる生活があり、人をいつくしむ姿勢が根づいている。</p> <p>自然と調和した都市の中で、人々の価値観・人生観にもとづく自由で多様な生活が展開され、活力あるひらかれたまちづくりをめざす帯広市の都市像を、「緑ひろがる北のフロンティア都市おびひろ」とするものである。</p>	<p>こうしたまちづくりの考え方、これからの地域社会を形成するうえで基調となるものであり、新しい時代にも、共通するものです。</p> <p>また、市民の価値観は、精神的なゆとりや豊かさを求める傾向にあり、自由な生活選択や自己実現が求められています。</p> <p>こうした自己実現を求める市民の情熱やエネルギー、知恵と力を生かし、主体的な発想に基づく、十勝・帯広ならではの自主・自律のまちづくりを展開していかなければなりません。</p> <p>都市は、市民が連帯して暮らす場であり、自分たちのまちに誇りがもて、将来に夢と希望のもてる場でなければなりません。</p> <p>帯広市は、21世紀を歩み出すにあたり、これまでのまちづくりの考え方を受け継ぐとともに、時代の潮流などを受け、新時代のさらなる発展を確固としたものにするため、</p> <p>人間尊重を基本に、自然環境を守りながら十勝農業を核とする活力あふれる地域社会、都市と農村が共生するまちづくりをめざします。また、地域社会が一体となりあたたかい人間関係を築きながら、安心して暮らすことができるまち、風土に根ざした個性ある文化が育まれるまちづくりを、市民の参画と協働によりすすめます。</p> <p>こうしたまちづくりの基本方向に基づき、帯広市のめざす都市像を、次のとおりとします。</p> <p><u>人と自然が共生する可能性の大地</u> <u>新世紀を拓く田園都市おびひろ</u> <u>～緑ひろがる北のフロンティア～</u></p>

総合計画策定審議会（第五期総合計画）中間報告及び答申書の「めざす姿」

中間報告	答申書
<p>（めざす姿）</p> <p>帯広市は、管内町村との連携・交流の中で、十勝全体への広域的なサービス提供拠点としての役割を果たしながら、地域を形成してきました。</p> <p>都市は、もともと周辺の地域社会から孤立しては、成立も発展ありません。今日の帯広の姿を考えると、その発展をささえてきたのは農業であり、自然であり、そして、市民の行動力と、管内町村との連帯であります。</p> <p>それが、十勝・帯広の地域の特性を形づくってきており、また地域住民の共有の財産でもあります。このような状況を踏まえると、これまでのまちづくりの基調である近代的田園都市やアグリポリスなど、都市と農村が共存し、自然と共生する「田園都市」の考え方を、今後とも継承し、そして、守り育て、後世に財産として引き継いでいくことが必要であります。</p> <p>人間の生命の源である食糧の問題は、世界的な課題となっています。国際化の進展等により輸入食料が増加する一方で、食品の安全性や市民の健康に関する関心が高まってきており、良質な食糧を安定的に生産・供給する農業の役割がますます重要になりつつあります。一方、農村のもつ多面的な機能は、豊かな自然とのふれあいを求める人々のレクリエーション、環境教育、保養などの場としても重視されてきています。</p> <p>また、農業を核とする産業の育成や、十勝全体を視野に入れた商業・サービス機能の充実が求められています。</p> <p>これからも、自然環境に恵まれた地域の特性を活かした「十勝ブランド」を形成するなど、都市と農村が互いに補完しながら、連携・交流しあい、地域の活力を維持し向上させていくことが望ましいと考えます。</p> <p>市民の価値観は、これまでの大量生産・大量消費・大量廃棄といった経済性を優先した物質的な豊かさや利便性よりも、安らぎやゆとりといった、心の豊かさを求める生活をより重視する傾向へと変化してきています。</p> <p>特に、豊かな自然は、人間のみならずあらゆる生命が営まれるための重要な要素となってきます。今後、すべての市民が、環境を守り、自然と共生して暮らしていくためには、地域の環境はそこに住む人々の手によって守っていくことを基本とすることが重要であります。</p> <p>地域の個性の源である自然と人とのふれあいによって育まれた地域の資源・財産を 層大切に、行政・事業者・市民が一体となって、資源循環型の地域社会をつくっていくことが望ましいと考えます。</p> <p>今日、人間生活の基礎的な単位となる家庭は、核家族化の進展や女性の社会進出、ひとり親家庭の増加等により、その姿が大きく変化してきています。これまでの社会風潮が、ともすれば、個人の自由を優先させるあまり、人と人とのつながりや、地域社会を構成する家庭相互間の連帯意識が希薄になりがちとなり、人々の社会性や協調性が、徐々に低下してきている傾向にあることは否めません。</p> <p>あらゆる世代の人々が、それぞれの人権を尊重し、ともにささえあうといった連帯感を持ちながら、市民一人ひとりが意志と責任をもって地域づくりに参加することが、市民による自治を実現していくうえで必要であります。そのため、市民の意志がより市政に反映されるしくみをつくる必要であり、市民の行動力を行政がささえる協働によるまちづくりをすすめていくことが望ましいと考えます。</p> <p>まちづくりに対する市民ニーズは、従来のハード整備から身近なソフト施策へと変化してきており、これまでの縦割りの行政システムでは、多様化する住民要望を十分に満たすことが困難になってきています。</p> <p>今後、自治体自らが地域のニーズにできるだけの確に、しかも総合的に対応していくためには、行政のしくみを簡素かつ透明性の高いものにする行財政改革への取り組みなどが重要であります。</p>	<p>（めざす姿）</p> <p>北海道の開拓は、主に官設の屯田兵村を拠点として開発が進められてきましたが、十勝・帯広は、晩成社のような民間企業体や国内各地からの縁故入植者たちの自主的・自発的な努力、いわばフロンティア精神と連帯意識にささえられた行動力によって、まちがつくられ発展してきました。</p> <p>先住民族のアイヌの人々が生活していたこの地に晩成社が入植して以来、豊かな自然環境ではありますが厳しい自然条件のもと、国内の様々な地域の人々や文化を受け入れながら、協働の精神や進取の気風が受け継がれてきています。</p> <p>また、帯広市は、十勝平野の中心に位置する内陸都市という地理的な好条件から、これまで管内町村との連携・交流の中で、十勝全体への広域的なサービス提供拠点としての役割を果たすとともに、さらに、諸外国の文化、特に農業技術などを積極的に取り入れ、国内でも有数の畑作・酪農地帯に発展した十勝の中心都市として、地域を形成してきました。</p> <p>都市は、もともと周辺の地域社会から孤立しては、成立も発展ありません。今日の帯広の姿を考えると、その発展をささえてきたのは農業であり、自然であり、そして、市民の行動力と管内町村との連帯であります。</p> <p>それが、十勝・帯広の地域の特性を形づくってきており、また地域住民の共有の財産でもあります。</p> <p>都市と農村との共存</p> <p>人間の生命の源である食料の問題は、今日、世界的な課題となっています。国際化の進展等により輸入食料が増加する一方で、食品の安全性や市民の健康に対する関心が高まってきており、良質な食料を安定的に生産・供給する農業の役割がますます重要になってきています。</p> <p>一方、農村のもつ多面的な機能は、豊かな自然とのふれあいを求める人々のレクリエーション、環境教育、保養の場などとしても重視されてきています。また、農業を核とする産業の育成や、十勝全体を視野に入れた商業・サービス機能の充実が求められています。</p> <p>これからも、自然環境に恵まれた地域の特性を活かした「十勝ブランド」を形成するなど、都市と農村が互いに補完しながら、連携・交流しあい、地域の活力を維持し向上させていくことが必要であります。</p> <p>人と自然との共生</p> <p>市民の価値観は、これまでの大量生産・大量消費・大量廃棄といった経済性を優先した物質的な豊かさや利便性よりも、安らぎやゆとりといった、心の豊かさを求める生活をより重視する傾向へと変化してきています。</p> <p>特に、豊かな自然は、人間のみならずあらゆる生命が営まれるための重要な要素であり、人間活動の基盤となっています。自然と人間生活のバランスを、著しく失することなく暮らしていたアイヌの人々の知恵に学びながら、地域の自然環境はそこに住む人々の手によって守っていくことを基本に、すべての地球市民が、地球環境を守り、自然と共生して暮らしていくことの大切さを、市民一人ひとりが認識を深めていくことが重要であります。</p> <p>地域の個性の源である「自然」と「人」とのふれあいによって育まれた地域の資源・財産を一層大切に、行政・事業者・市民が一体となって、資源循環型の地域社会をつくっていくことが必要であります。</p> <p>人と人との共育</p> <p>今日、人間生活の基礎的な単位となる家庭は、核家族化の進展や女性の社会進出、ひとり親家庭の増加等により、その姿が大きく変化してきており、その絆意識も徐々に希薄になってきています。また、市民の価値観が多様化し、個人の自由が優先されるあまり、人々の社会性や協調性が低下してきている傾向にあります。</p> <p>このことが、家庭や地域社会の教育力の低下や人々のモラルの欠如などとなり、社会全体の問題となっています。</p> <p>これからの時代は、一方で個人の自由や権利を尊重しながらも、市民一人ひとりが義務と責任を果たし、人と人がつながり、ふれあう健全な地域社会の形成が求められています。</p> <p>あらゆる世代の人々が、それぞれの人権を尊重しあい、助けあい、あたたかい人の絆をつくりあげながら、誰もが安心して暮らすことのできる質的に充実したまちづくりが必要であります。</p> <p>市民と行政との協働</p> <p>まちづくりの担い手は、一人ひとりの市民であります。これからのまちづくりは、これまで以上に、市民の主體的な行動と責任によって進められなければなりません。市民一人ひとりが、責任をもって地域づくりに参加することが、市民による自治を実現していくうえで重要であり、市民の意志がより市政に反映されるしくみをつくる必要であります。</p> <p>暮らしの場である地域が、市民にとって快適な生活や活動の場として持続的に発展し続けるため、市民の英知と情熱と行動力を集めながら、地域のあらゆる資源・財産を活かした独自の文化を創造する、市民と行政との協働のまちづくりが必要であります。</p> <p>理念の継承</p> <p>時代の大きな変革期を乗り越え、帯広市が21世紀においても生み心地のよい都市として発展を続け、市民の誰からも愛されるまちであり続けるために、先人が築きあげたかけがえのない地域の特性を財産として守り育て、後世に引き継いでいくことが必要であります。</p> <p>これまでのまちづくりの基調である、都市と農村が共存し、人と自然が共生し、そして、人と人とが共に育む「田園都市」の考え方を、今後とも継承し、21世紀に向かって真の豊かさを実感できる地域社会の実現をめざしていくことが必要であります。</p>

帯広市のめざす姿（将来像）に関してこれまでに出された意見

（考え方に関する意見）

これまでに出された主な意見
<ul style="list-style-type: none"> ・今話題になっているものを一番に持ってくるのではなく、将来も変わらない本質的なものをしっかりと見据えることが必要。
<p>【参考】これまでの総合計画の都市像の根底にあるもの 「都市と農村の共生」、「自然と都市の共生」、「人間尊重」、「風土に根ざした文化」など</p>

（内容に関する意見）

これまでに出された主な意見	これまでの意見から想定される帯広市のめざす姿（参考例）
<ul style="list-style-type: none"> ・障害者が住みよいまちはすべての人にとって住みよい。だれもが安心して住めるまちという考えに立つべき。 ・人間は皆平等である ・障害者を区別しない社会であるべき。 ・仕事と生活の調和があるまちであるべき。 	人にやさしいまち
<ul style="list-style-type: none"> ・地元の良いものを食するということが健康につながり、医療費の削減にもつながる。 	人が健康で暮らせるまち
<ul style="list-style-type: none"> ・農業は基幹産業として地域がしっかり支えていくことが必要。 ・帯広・十勝は国の食料生産を担う重要な場所であることを認識する必要がある。 	都市と農村が共生するまち
<ul style="list-style-type: none"> ・良質な水や空気を今後も維持・継承していくことが必要 	自然環境と共生するまち
<ul style="list-style-type: none"> ・女性や障害者などこれまであまり社会への参加がなかった人たちの能力が引き出され発揮できるまちであってほしい。 ・少子高齢化により、労働力人口の減少が起きるが、女性や高齢者等多様な人材の能力を活用することが必要。 	人が社会で活躍するまち
<ul style="list-style-type: none"> ・右肩上がりばかり求めるのではなく、今の状態でどう豊かさを求めていくのかという発想が必要。 	質的に豊かなまち
<ul style="list-style-type: none"> ・地域の課題を地域で解決するという考え方を取り戻すことが必要。 ・基本的には八コ物に頼らず、市民の協働やアイデアでまちづくりを進める考えが基本にあるべき。 	市民と行政が協働する自治のまち
<ul style="list-style-type: none"> ・帯広らしさや夢があることは必要。 ・帯広の森を育て帯広市の特徴としてアピールすべき。 	個性や特性を活かしたまち